

2020年度国公立大志願状況

河合塾

2020/2/21

国公立大の確定志願者数が20日に文部科学省から発表された。総志願者数は439,565人、志願倍率は4.4倍であった。以下、発表された国公立大の出願状況について概況をまとめた。

■志願者数は大きく減少、志願倍率もダウン

2月5日に締め切られた国公立大一般選抜の総志願者数は439,565人と前年から約3万人減少した。募集人員に対する志願倍率は前年の4.7倍から0.3ポイントダウンの4.4倍となった【表1】。

【表1】国公立大志願状況

区分	日程	募集人員(A)		志願者数(B)				志願倍率(B/A)	
		19年度	20年度	19年度	20年度	前年差	前年比	19年度	20年度
国立大学	前期	64,031	63,828	194,525	182,772	-11,753	94%	3.0	2.9
	後期	14,335	14,168	135,628	124,420	-11,208	92%	9.5	8.8
	計	78,366	77,996	330,153	307,192	-22,961	93%	4.2	3.9
公立大学	前期	16,102	16,223	64,010	60,280	-3,730	94%	4.0	3.7
	後期	3,648	3,572	43,986	40,667	-3,319	92%	12.1	11.4
	中期	2,310	2,355	31,687	31,426	-261	99%	13.7	13.3
	計	22,060	22,150	139,683	132,373	-7,310	95%	6.3	6.0
国公立大学 計	前期	80,133	80,051	258,535	243,052	-15,483	94%	3.2	3.0
	後期	17,983	17,740	179,614	165,087	-14,527	92%	10.0	9.3
	中期	2,310	2,355	31,687	31,426	-261	99%	13.7	13.3
	計	100,426	100,146	469,836	439,565	-30,271	94%	4.7	4.4

※文部科学省資料より

※分離・分割方式ではなく独自日程で実施する大学は上表には含まれない

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は243,052人（前年比94%）と大きく減少した。24万人台前半という数字は、過去20年を振り返っても最少である。今春は18歳人口の減少に加え、既卒生も減少しており、大学志願者数は減少したものと推測する（センター試験受験者数は4%減）。国公立大入試もこの影響を受けた形だ。また、センター試験の平均点ダウンも志願者減の要因となった。思うように得点できず国公立大への出願に消極的になった受験生も少なくなかったのではないかと。

全体の志願者が減少するなか、前年入試で志願倍率（志願者／募集人員）が2.0倍以下の低倍率入試となっていた募集区分では、今年の志願者数が増加した大学が目立った。今春入試では難関大を敬遠する動きはみられなかったものの、前年低倍率の大学など、合格の可能性が高そうな大学を探して出願した受験者が多かった様子が見えがえた。

【表2】は、大学所在地区別の志願状況をまとめたものである。多くの地区で志願者が減少し、とりわけ北関東、東海、近畿、九州地区で減少率が高くなった。

例外的に志願者が増加したのが、北海道、四国地区であった。北海道地区では2019年春に公立大学法人化した公立千歳科学技術大が今春から分離分割方式で入試を実施したことに加え、室蘭工業大などで志願者が増加したためである。室蘭工業大は昨年実質倍率が1.6倍と低倍率だった理工・システム理化学で志願者が倍増した。四国地区では徳島大が前年比114%と志願者が増加したが、こちらも前年低倍率だった学部で増加した。

後期日程は前年比92%と前期日程以上の減少幅となった。2020年度も後期日程廃止・縮小の動きが続いていることに加え、ボーダーラインが高い後期日程は前期日程以上に出願しにくかったものとする。また、中期日程は前年比98%と他の日程に比べ減

【表2】国公立大(前期日程)地区別志願状況

地区	19年度	20年度	前年差	前年比
北海道	12,297	12,584	+287	102%
東北	20,776	19,376	-1,400	93%
北関東	14,249	13,108	-1,141	92%
南関東	51,502	48,741	-2,761	95%
甲信越	12,827	12,213	-614	95%
北陸	22,619	21,057	-1,562	93%
東海	11,283	10,221	-1,062	91%
近畿	43,531	39,697	-3,834	91%
中国	23,862	22,872	-990	96%
四国	10,723	11,000	+277	103%
九州	34,866	32,183	-2,683	92%

※文部科学省資料より

※北関東：茨城・栃木・群馬 南関東：埼玉・千葉・東京・神奈川

少率は小幅であった。近年中期日程を新規実施する大学が増えていることが要因である。

■系統別では社会科学系、医療系で志願者が大きく減少

【表3】は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。

国公立大全体の前年比 94% を基準に各系統の前年比を確認したい。国公立大全体で志願者が減少していることもあり、「総合・環境・情報・人間」学系をのぞき、いずれの系統も志願者が減少した。とくに社会科学系、医療系などで減少率が高くなった。一方、理系では理・工学系では減少率は小幅、農学系も国公立大全体と同率となった。

以下に、主な系統について確認していく。

※文中の志願者数・前年比は特に記載がない場合、前期日程を表す

【表3】国公立大(前期日程)学部系統別志願状況

系統	募集人員 (A)		志願者数 (B)				志願倍率 (B/A)	
	19 年度	20 年度	19 年度	20 年度	前年差	前年比	19 年度	20 年度
文・人文	7,025	7,038	23,387	21,946	-1,441	94%	3.3	3.1
社会・国際	4,021	3,969	14,739	12,912	-1,827	88%	3.7	3.3
法・政治	4,163	4,158	13,995	12,796	-1,199	91%	3.4	3.1
経済・経営・商	8,146	8,119	28,438	25,702	-2,736	90%	3.5	3.2
教育－教員養成課程	7,281	7,172	19,056	17,606	-1,450	92%	2.6	2.5
教育－総合科学課程	828	838	2,486	2,122	-364	85%	3.0	2.5
理	4,967	4,907	14,604	14,036	-568	96%	2.9	2.9
工	22,799	22,864	69,016	67,082	-1,934	97%	3.0	2.9
農	5,574	5,651	16,455	15,469	-986	94%	3.0	2.7
医・歯・薬・保健	10,572	10,529	37,851	34,754	-3,097	92%	3.6	3.3
医	3,635	3,581	16,390	14,735	-1,655	90%	4.5	4.1
歯	447	450	1,824	1,657	-167	91%	4.1	3.7
薬	756	752	2,859	2,620	-239	92%	3.8	3.5
看護	3,930	3,931	11,256	10,321	-935	92%	2.9	2.6
医療技術・他	1,804	1,815	5,522	5,421	-101	98%	3.1	3.0
生活科学	789	788	2,612	2,424	-188	93%	3.3	3.1
芸術・スポーツ科学	1,580	1,582	7,502	7,319	-183	98%	4.7	4.6
総合・環境・情報・人間	2,395	2,493	8,399	8,805	+406	105%	3.5	3.5

※河合塾調べ(大学発表の数値と文部科学省発表の数値が異なる大学は大学発表値を優先)

※系統の分類は河合塾による

【文・人文学系】

系統全体の志願者数は前年比 94% で、前期日程全体と同率

となった。難関大のなかでも北海道大(文)、東北大(教育)、名古屋大(教育)、九州大(教育)などでは前年から 2~3 割減となった。また群馬県立女子大(文)、北九州市立大(外国語)なども高い減少率となった。いずれも前年志願者が増加しており警戒された形だ。一方、東北大(文)、大阪大(外国語)、神戸大(文)など前年志願者が減少した大学では今春の志願者は増加しており、前年の反動が目立った。なお、今春新設される県立広島大(地域創生－地域文化)は志願倍率 2.3 倍にとどまった。

【社会科学系(社会・国際、法・政治、経済・経営・商)】

社会科学系 3 系統の志願者数はいずれも 1 割程度減少した。「社会・国際」では、国際系学部・学科で志願者の減少が目立った。前年入試で志願者が増加した大学が多く、その反動が出た形だ。

「法・政治」では東京大(文一)、一橋大(法)、京都大(法)などが前年並みかやや増の志願者を集めた一方、北海道大(法) 119%→66%、東京都立大(法) 137%→69%、大阪大(法) 128%→73%、島根大(法文－法経) 65%→202%など、志願者数が前年から極端な増減を示す大学も目立った(数字は志願者前年比、19 年度→20 年度)。

「経済・経営・商」では 2 年連続の志願者減となった。東北大(経済)(前年比 83%)、東京大(文二)(同 94%)、一橋大(経済 同 78%、商 同 90%)、大阪大(経済)(同 89%)など、難関大でも志願者減少が目立った。反対に志願者の増加率が高かった大学は、釧路公立大(経済)、高崎経済大(経済)、神戸大(経営)、長崎県立大(経営)などであるが、いずれも前年入試で志願者が減少した大学であった。

【自然科学系(理、工、農)】

志願者数の減少幅は他の学部系統に比べ小幅となった。「理」では、東北大(理)、神戸大(理)で 2 年連続の志願者増、大阪大(理)では前年 1 割増となった志願者数を今年も維持するなど、難関大では前年の反動を感じさせない大学もみられた。一方、大阪市立大では 3 年連続の志願者減となった。学科によっては志願倍率が 2 倍以下となったところもみられた。

「工」の志願者前年比は 97% であった。前述の室蘭工業大のほか、富山大(都市デザイン)、公立諏訪東京理科大などで志願者が大きく増加した。富山大は 2 次試験の配点が高い材料デザイン工 b の志願者が倍増した。公立諏訪東京理科大では学部全体で前年の 2 倍以上の志願者が集まったが、なかでも前年入試で低倍率だ

った機械電気工学科B方式は前年の4倍を超える志願者が集まり、今春の志願倍率は8.0倍となった。

「農」では、県立広島大で生物資源科学部が新設された。志願倍率は3.3倍となり、「農」全体より高くなった。また、2次試験が2教科→1教科となった山口大（農）では志願者は前年比112%と大きく増加した。なお、難関10大学では前年比92%、全大学で志願者が減少しており、人気は低調であった。

【医療系（医・歯・薬・保健）】

医療系全体の志願者数は前年比92%と大きく減少した。なかでも「医」では前期日程で前年比90%と大きく減少、6年連続の志願者減となった。前年から2割以上志願者が減少した大学数も前年の10大学から18大学に増加した。「薬」も前年比92%と減少した。減少大が目立つなか、九州大（薬）では前年の反動から前年比128%と増加した。また、大阪大（薬）は2019年度入試で前年から1割増となっていた志願者数を今春も維持した。「医療技術・他」は医療系の中で最も減少幅が小さい。今春は私立大でリハビリテーション、検査技術などこの分野の学部・学科新設が多く、これが国公立大にも目を向けるきっかけになったのかもしれない。

【その他】

「総合・環境・情報・人間」の志願者は前年比105%と全系統中で唯一増加した。分野別にみると、「総合」「情報」分野で志願者が増加した。

「総合」分野では、新潟大（創生）、島根県立大（総合政策）、徳島大（総合科学）など、前年低倍率だったところで志願者の増加が目立った。「情報」は福知山公立大（情報）、長崎大（情報データ科学）の2大学で学部新設した影響で志願者が増加した。「情報」は模試時には人気の分野であったが、既存の学部では志願者が減少したところも目立った。

■難関国立大の志願状況

【表4】は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況をまとめたものである。

難関10大学全体では、前期日程は55,211人（前年比95%）と減少した。国公立大全体に比べ減少率はやや低く、難関大を敬遠する動きはみられなかった。とはいえ、10大学のうち7大学の志願者数が過去10年で最少となっており、競争の緩和が明確となった。大学別に見ると、大阪大で前年比99%、東京大、京都大で同98%と前年並みから微減となったほかは、いずれの大学も志願者前年比は大きくダウンした。

以下、難関10大学の状況を個別にみていく。

【北海道大学】

前期日程の志願者数は5,474人（前年比94%）、過去10年で最少となった。今春は文系学部で前年比91%と減少幅が大きい。文系学部では前年入試で志願者の増加が目立った文、教育、法の3学部で減少した。なかでも法学部では前年比66%と大きく減少した。一方で前年に志願者が大きく減少した総合入試文系では今春の志願者は前年から4割増となるなど、前年入試の反動が目立った。

理系学部でも前年の反動が目立つ。前年志願者が増加した獣医、水産学部では志願者が減少、前年に志願者が減少していた医学部では前年比111%と大きく増加した。なかでも医学科の志願者は前年比119%と2割近く増加した。

後期日程の志願者は前年比95%と減少した。学部別にみると増加した学部もあり、法、経済、農学部では2年連続で増加した。難関大では後期日程を実施する大学・学部は限られており、前年の結果や学部系統の人気

【表4】国立難関10大学の志願状況

大学名	前期日程				後期日程			
	19年度	20年度	前年差	前年比	19年度	20年度	前年差	前年比
北海道	5,843	5,474	-369	94%	4,498	4,278	-220	95%
東北	4,813	4,384	-429	91%	1,439	1,354	-85	94%
東京	9,483	9,259	-224	98%	—	—	—	—
東京工業	4,222	3,790	-432	90%	497	512	+15	103%
一橋	2,687	2,490	-197	93%	1,123	1,075	-48	96%
名古屋	4,736	4,422	-314	93%	67	55	-12	82%
京都	7,511	7,347	-164	98%	514	352	-162	68%
大阪	7,536	7,462	-74	99%	—	—	—	—
神戸	5,933	5,569	-364	94%	4,026	3,746	-280	93%
九州	5,239	5,014	-225	96%	2,309	2,227	-82	96%
難関10計	58,003	55,211	-2,792	95%	14,473	13,599	-874	94%
その他大計	200,532	187,841	-12,691	94%	165,141	151,488	-13,653	92%

※文部科学省資料より

※「その他大計」は難関10大を除いた国公立大計

に関わりなく、志願者が増加するケースもみられた。

【東北大学】

前期日程の志願者は前年比 91%、2 年連続で減少した。今春の志願者数はここ 20 年でみても最少となった。経済学部では理系生を対象とした理系入試を導入した。これに伴い文系入試では募集人員が 30 名減となった。このため文系入試の志願者は前年比 76%と大きく減少した。一方、理系入試は募集人員 10 名に 31 人の志願者が集まった。志願倍率で比較すると、文系入試の 2.2 倍に対し、理系入試は 3.1 倍と理系生の掘り起こしに一定の成功を収めたといえそうだ。医学科も臨時定員の返還により、前期日程の募集人員は 28 名減となった。これを警戒し、志願者は前年比 71%と大きく減少したため、志願倍率は 3.4→3.3 倍と大きく変わらなかった。

後期日程では、経済学部で志願者は増加、理学部で減少した。経済学部では前期日程同様、理系入試を導入した。募集人員 10 名に対し、前期日程を上回る 58 人の志願者が集まった。理学部は前年入試で大きく志願者が増加しており、その反動が出た。

【東京大学】

大学全体の志願者数は 98%とやや減少した。東京大でも過去 10 年で最少の志願者数となった。類別では文科一類、理科一類で前年並み、理科三類でわずかながら志願者は増加した。文科一類では前年まで 3 年連続で増加していた志願者数を維持する形となった。

一方、文科二類・三類、理科二類では志願者は減少した。文科二類では前年入試で合格者の平均点・最低点とも文科一類を上回っており、警戒された形だ。

第 1 段階選抜は全科類で実施された。志願者が減少した科類では、合格最低点が前年から大幅にダウンした。

【東京工業大学】

前期日程の志願者数は前年比 90%、難関 10 大学のなかで最も高い減少率となった。理学院で前年並みの志願者数となったほかは、いずれの学院も減少した。なかでも工学院（前年比 84%）、環境・社会理工学院（同 82%）で減少率が高かった。志願倍率をみると、今春も情報理工学院が 9.1 倍と群を抜いて高く、一番人気となった。

生命理工学院のみで実施する後期日程では、志願者数は前年比 103%と 2 年連続で増加した。

【一橋大学】

前期日程の志願者数は、社会科学系の不人気もあり前年比 93%と 2 年連続で減少した。志願者数(2,490 人)でみても過去 20 年でも最少となった。学部別にみると、社会（前年比 103%）、法（同 101%）、経済（同 78%）商（同 90%）となった。社会科学系学部の不人気もあり、年間を通じて人気を感じられなかった一橋大であるが、一部の学部は前年並みからやや増の志願者数となった。社会学部の志願者増は前年入試の反動による。法、経済系学部の動向は東京大と同様となった。

後期日程では、志願者数は前年比 96%と減少した。こちらは 2 年連続の減少となった。

【名古屋大学】

前期日程の志願者数は前年比 93%と減少した。過去 10 年で最少である。学部別にみても医学部を除く全学部で志願者が減少した。医学部医学科では今春から 2 段階選抜を廃止した影響で、志願者は前年比 118%と大きく増加した。一方、教育学部では前年入試科目の変更で志願者数が倍増していた反動で今春は前年比 64%と大幅に減少した。工学部では学部全体の志願者が減少したなか、電気電子情報工学科では前年比 107%と増加した。情報学部では 2 年連続の志願者減となった。なかでも人間・社会情報学科で前年比 70%と減少率が高くなった。前年入試で志願者数が大幅に増加した反動である。

医学部医学科のみで実施される後期日程は、前年比 82%と減少した。前年の志願者が大きく増加していたことから敬遠された。

【京都大学】

前期日程の志願者数は前年比 98%とやや減少、2013 年度をピークに 7 年連続の減少となった。前年入試で志願者が減少していた法、経済学部では、今春は増加に転じた。一方、3 年連続の志願者増となっていた文学

部は、今春は前年比 96%と減少した。また総合人間学部は、センター試験で平均点がダウンした英語・数学・国語を合否判定に利用しないため今春は多くの志願者が集まることが予想された。しかし志願者の集中を警戒されたようで、結果的には4年連続の志願者減となった。理系学部では工学部で前年比 103%と志願者が増加、なかでも情報学科で同 114%と大きく増加した。理学部では、志願者は 2019 年度入試で前年から 1 割増となっていたが、今春は減少に転じ、一昨年の志願者数に戻った。

後期日程で実施される法学部特色入試では、前年入試で特色入試開始以来最多の志願者が集まったが、今春はその反動で前年比 68%と大きく減少した。

【大阪大学】

前期日程の志願者数は前年比 99%、前年並みとなった。文系学部では、文、外国語学部で志願者が増加した。一方、前年の志願者が増加していた法、経済学部では志願者が減少した。とくに法学部では前年比 73%、志願倍率は 1.9 倍にダウンした。近隣の法学部では大阪市立大、神戸大で志願者が増加しており、他大へ流出したものとみる。大阪大（法）では近年極端な隔年現象を起こしており、次年度は志願者の大幅増加が警戒される。

理系学部でも前年の反動がみられた。前年志願者が減少した工学部は今年は増加し、前年志願者が増加していた基礎工学部では今年は減少した。なお、医学部では医学科で前年比 121%と志願者が大きく増加した。第 1 段階選抜の基準が緩和されたことに加え、今春から 2 次の配点比率が高くなった。センター試験の平均点ダウンにより目標の得点が取れなかった医学科志望者が集中したものと推測する。

【神戸大学】

前期日程の志願者数は 94%と減少した。前年は理系学部を中心に京都大、大阪大を敬遠した受験生の受け皿となり、難関 10 大学の中では唯一志願者が増加していた神戸大であったが、今春はその反動もあり、減少率は高めとなった。

文系学部では、前年まで 4 年連続で志願者増となっていた経済学部で志願者が大きく減少、代わって経営学部で前年比 120%と大きく増加した。また 2 年連続で志願者減となっていた文学部でも志願者が増加した。理系学部では、前年の反動で理学部を除くすべての学部で志願者が減少した。なかでも医、海事科学、農学部で減少率が高くなった。

後期日程の志願者数も 93%と減少した。前年の反動で志願者が減少した学部がある一方、理、工、医学部では 2 年連続の志願者減となった。

【九州大学】

前期日程の志願者数は前年比 96%となった。教育、理、農、歯学部など前年志願者が増加していた学部で減少した一方、前年入試で志願者が減少していた法、薬学部では志願者が増加と、前年の反動が目立った。今春学科を改組した芸術工学部では志願者は前年比 95%、2 年連続の志願者減となった。募集区分別に志願倍率をみると、1 年次修了時点で所属コースを決定する学科一括入試で最も低くなった。医学科では志願者は前年比 76%と大きく減少した。前年の志願者が大きく増加していたことに加え、今春は第 1 段階選抜の実施予告倍率を 4 倍から 2.5 倍に引き下げて狭き門となっていたことが警戒された。

後期日程の志願者は前年比 96%となった。学部別では文、法、農、薬学部で前年入試の反動が目立った。なかでも前年の志願者が半減していた農学部では今春は前年比 139%まで増加と増減幅が大きく、来春も注意が必要であろう。

大学別の国公立大の出願状況は河合塾入試情報サイト Kei-Net (※) にて閲覧が可能となっているのでご活用いただきたい。

※Kei-Net 国公立大出願状況：<https://www.keinet.ne.jp/shutsugan/index.html>